ナボニドス治世下のエアンナ神殿における
ša rēš šarri bēl piqitti Eanna の地位について

On the Status of the *ša rēš šarri bēl piqitti Eanna*
 in the Eanna Temple during the Reign of Nabonidus

鵜 木 元 尋^{*}
 UNOKI Motohito

ABSTRACT When discussing the roll of the *ša rēš šarri bēl piqitti Eanna* and/or its status in Eanna temple, scholars tend to do so without giving due attention to changes that might have occurred in its roll and/or status over a period of years.

In this paper I would reexamine the relative status of the *ša rēš šarri bēl piqitti Eanna* vis-à-vis other Urukian officials during the reign of Nabonidus to see whether any change occurred in its relative status during the reign.

In administrative texts from Eanna dated to Nabonidus' reign, the *ša rēš šarri bēl piqitti Eanna*, a royal official stationed in Eanna temple often appears together with other temple officials. It is possible to divide these texts into two groups, 1) texts in which the name of the *ša rēš šarri bēl piqitti Eanna* is mentioned in the phrase *ina GUB-zu ša PNN* and 2) texts in which the *ša rēš šarri bēl piqitti Eanna* and other officials appear as parties involved. From a careful investigation of these two groups of texts the following three facts have emerged. First, the *šatam Eanna* begins to appear in the eleventh year of Nabonidus along with the *ša rēš šarri bēl piqitti Eanna* (e.g., *AnOr* 8, 27, *YOS* 6, 232). Second, the *ša rēš šarri bēl piqitti Eanna* invariably appears in the first position until king's thirteenth year, but, after that, it is the *šatam Eanna* that appears in the first position, while the *ša rēš šarri bēl piqitti Eanna* appears in the second (e.g., *YOS* 6, 177, 195, 198, *TCL* 12, 119). Third, another important temple official *qīpu ša Eanna*, who is also known as a royal appointee, appears sometimes following *ša rēš šarri bēl piqitti Eanna* but ahead of *šatam Eanna*, when latter is mentioned jointly,

* 中央大学大学院文学研究科西洋史学専攻博士課程
 Ph.D. Student, Chuo University

until twelfth year of Nabonidus (e.g. *AnOr* 8, 27, *YOS* 6, 79). However, it is known that the *qīpu ša Eanna* is not mentioned in the texts after Nabonidus' thirteenth year until the reign of Cyrus.

From the above observation, it become clear that the *ša rēš šarri bēl piqitti Eanna* was the highest officials in the Eanna temple officials during the early years of Nabonidus' reign, but that it had began to change from eleventh year of Nabonidus and after thirteenth year of Nabonidus the *šatam Eanna* occupied the first position, while the *ša rēš šarri bēl piqitti Eanna* occupied the second position in the hierarchy of the Eanna temple officials. The turnover of the temple officials at Eanna in Nabonidus' thirteenth year is particularly important when considered together with other changes that took place in that year.

はじめに

1941年, Mariano San Nicolò は新バビロニアとアケメネス朝ペルシャ時代の都市と神殿行政における役職に関する研究を出版し, その中で彼は1927年以前に出版された文書をもとにウルクのエアンナ神殿とシッパルのエバツバル神殿の行政役人に関して研究をしている。この研究以降, 新バビロニアとアケメネス朝時代の文書が刊行され, *qīpu ša Eanna*「エアンナの全権委員」, *šatam Eanna*「エアンナの行政官」, *tuṣṣar Eanna*「エアンナの書記」, そして *ša rēš šarri bēl piqitti Eanna*「王の役人兼エアンナの監督官」といった役職の研究がなされてきた。⁽²⁾近年になり Ronald H. Sack は従来の研究成果をふまえエアンナ神殿の主要な役人について考察し, *ša rēš šarri bēl piqitti Eanna* と *tuṣṣar Eanna* に⁽³⁾関して新しい見解を打ち出している。この2つの役職は新バビロニア時代だけでなくアケメネス朝時代にも見られる役職であり, Sack も従来の見解と同じように, この2つの時代を区別しないで考察している。しかしながら, これではそれぞれの時代におけるこの2役職の特徴が見えてこない。特に *ša rēš šarri bēl piqitti Eanna* はナボニドスが王位に就いて以降, エアンナ神殿の行政文書の中で頻繁にでてくるようになった役職である。⁽⁵⁾またナボニドスは即位してまもなく *ša rēš šarri ša (ina) muḫḫi quppi ša šarri*「王のバスケットに責任がある王の役人」と呼ばれる役職をエアンナ神殿に設置するなどエアンナ神殿の行政に対して干渉を行っている。⁽⁶⁾それゆえ, *ša rēš šarri bēl piqitti Eanna* が神

殿内でどのような活動を行い、いかなる地位を持っていたかを調査することは、ナボニドスの神殿行政の管理方法を解明する1つの手がかりになると思われる。そこで本稿では、ナボニドスの治世中の新バビロニア時代に時代を限定し、*ša reš šarri bēl piqitti Eanna* のエアンナ神殿における地位と役割を明らかにしていくことを目的とする。こうすることによって、新バビロニア時代の *ša reš šarri bēl piqitti Eanna* の特徴が見えてくるだけでなく、従来の見解や Sack の見解を見直すことにもなる。そこで、始めに *ša reš šarri bēl piqitti Eanna* を含むエアンナ神殿の主要な役人の活動についての従来の見解と Sack の見解について簡単に述べ、次に *ša reš šarri bēl piqitti Eanna* が言及されているエアンナ神殿出土の文書の中に他の主要神殿役人が言及されている場合を調査し、*ša reš šarri bēl piqitti Eanna* に在職した人物1人1人について神殿内の地位と役割を考察していく⁽⁷⁾。

I. エアンナ神殿の諸役人について

さてエアンナ神殿の重要な諸役職であるが、従来の見解によると、ナボニドスが即位する以前にエアンナ神殿の主要役人であったのは、*qīpu ša Eanna* 「エアンナの全権委員」、*šatam Eanna* 「エアンナの行政官」、*tuṣšar Eanna* 「エアンナの書記」の3つの役職であった。新バビロニア時代のエアンナ神殿において最も重要であった役職は *qīpu ša Eanna* であり、その機能は司法官として働き、神殿所有地を管理し、*širku* 「神殿奴隷」に対する司法権と彼らに軍役を割り当てる権限を持ち、また神殿役人の任命と彼らの活動に対する権限、会計の最終決算に関する権限をも持っていた。次に重要であった役職は *šatam Eanna* で、その機能の多くは *qīpu ša Eanna* と重なっていた。*tuṣšar Eanna* はエアンナの会計を記録、管理していた⁽⁸⁾。この3つの役職がエアンナ神殿の行政を監督していたが、神殿役人ではない *šākin tēmi ša Uruk* 「ウルクの知事」が神殿行政にかなりの発言力を持っていた。*šākin tēmi ša Uruk* はエアンナ神殿の行政文書において、ほとんどの場合に *qīpu ša Eanna* より先に述べられており、しばしば神殿裁判所の議長を務めることがあった⁽⁹⁾。こうしたことから、エアンナ神殿の行政における役人のヒエラルキーは、上から *qīpu ša Eanna*、*šatam Eanna*、*tuṣšar Eanna* という順序になり、*šākin tēmi ša Uruk* は *qīpu ša Eanna* と同等かそれ以上の地位にあったと思われる。また *šākin tēmi ša Uruk*、*qīpu ša*

Eanna, *šatam Eanna*, *ṭupšar Eanna* という4つの役職の在任者であるが、同時期に複数の人間がその役職に就くことはなく、定員は1名であったと思われる。⁽¹¹⁾

ナボニドスの時代になると、それまで独立した2つの役職であった *ša reš šarri* と *bēl piqitti Eanna* が *ša reš šarri bēl piqitti Eanna* という1つの役職になり、その地位は *ṭupšar Eanna* にとって代わり、*ṭupšar Eanna* は廃止された。そして *qīpu ša Eanna*, *šatam Eanna* と協力してエアンナ神殿の行政を監督するようになったとしている。⁽¹²⁾

以上が従来の見解であるが、Sack の見解は既に述べたように、*ṭupšar Eanna* と *ša reš šarri bēl piqitti Eanna* に関しては従来の見解と異なる。まず *ṭupšar Eanna* に対する見解で従来の見解と大きく異なる点は、*ṭupšar Eanna* がでてくるアケメネス朝時代の文書をもとに、*ṭupšar Eanna* が廃止され *ša reš šarri bēl piqitti Eanna* にとって代わられたという San Nicolò の説は現在の証拠からではや支持できない、としている点である。そして、ナボニドスの治世に *ṭupšar Eanna* が文書にでてこなくなったことに関するこれまでの誤解は次の2つのことに帰せられるとしている。1つは文書による証拠が欠如していること、もう1つはあまりに多くの権限を *ṭupšar Eanna* と *ša reš šarri bēl piqitti Eanna* の2つの役職に関連づけて考えていたことである。そして *ṭupšar Eanna* は、*qīpu ša Eanna* と *šatam Eanna* の両者と同じ様な権限を持っていなかったと述べている。⁽¹³⁾

更に Sack は、*ṭupšar Eanna* の訳語として “temple accountant (神殿会計官)” という訳語が行政文書の中で出てくるこの役人の責務と活動により即しているとしている。また、同時期、あるいはほぼ同時期に複数の人間が *ṭupšar Eanna* と呼ばれ得たように思われるとし、1つの役職はいかなる時にも1人の人間しか就くことはできなかったというこれまでの説に反対している。

一方 *ša reš šarri bēl piqitti Eanna* に関する Sack の見解であるが、彼はこの役職を *ša reš šarri* と *bēl piqitti* に分けて考察している。まず *ša reš šarri* であるが、Sack はこのタイトルに関連した責務を決定できないでいるが、重要性の点で *ša reš šarri* は *rab reši* より下であり、ある場所から他の場所へと移動する一種の監査官 (Inspector) としての義務を果たしていたとしている。⁽¹⁴⁾ また *ša reš šarri bēl piqitti Eanna* が文書にあらわれる時期については、San Nicolò がナボ

ニドスの即位後に *ša reš šarri* と *bēl piqitti* が1つになったとしているの⁽¹⁵⁾に對し、Sack はネブカドネザル2世の時代から *ša reš šarri bēl piqitti Eanna* が文書の中に見られると述べ、現在の証拠からこうしたタイトルの結合はネブカドネザルの治世に早くも見られるとしている。また、宮殿による神殿の管理は新バビロニア朝を通じて一般的であったと言っている。⁽¹⁶⁾

一方 *bēl piqitti* であるが、新バビロニア朝時代になると、*bēl piqitti ša qīpu* や *bēl piqitti ša PN* といった具合に責務を限定する要素が *bēl piqitti* の後に付け加わるようになり、この要素がこうした役職の明らかな増加を説明するとしている。⁽¹⁷⁾ここから、新バビロニア朝後期の契約文書にでてくる *bēl piqitti Eanna* は以上のような *bēl piqitti* の拡大された使用を示し、*qīpu* や *šatammu*, *šākin tēmi* と同じ様な重要性はこの役職には与えられていなかったと推測している。そして *bēl piqitti* は、少なくともエアンナ神殿においては様々な行政官と監督官と働く一種の事務官で、*tuṣsar Eanna*「エアンナの会計官」の管轄下にあった⁽¹⁸⁾としている。

Sack の見解と従来の見解は以上の通りである。Sack の見解の特徴は従来⁽¹⁹⁾の見解ほどに *ša reš šarri bēl piqitti Eanna* を重要視していない点である。しかしナボニドスが即位すると、先に述べたように、エアンナ神殿出土の文書の中にそれまであまり見られなかった *ša reš šarri bēl piqitti Eanna* がでてくるようになる。たしかに *ša reš šarri bēl piqitti Eanna* は Sack が指摘しているように、*ša reš šarri* が *bēl piqitti Eanna* を兼任してできた役職であると考えられる。⁽¹⁹⁾しかし現存する文書を見る限り、この役職は小作契約と小作料の徴収、家畜と神殿人員の管理に責任があり、また神殿に不足している物資を調達させることにも責任があったことがわかる。つまりこの役職の活動は、エアンナの神殿行政のほとんどあらゆる領域に及び、神殿の所領経営にかなり深く関係していたと言え、それまで *qīpu ša Eanna* が負っていた役割の一部を果たすようになったと言える。またこの役職は、犯罪者の尋問を行いその処分の決定にも関与するなど、司法に関わる分野にもある程度の権威を持ち、時にはナボニドスや皇太子ベルシャザルの勅令を他の神殿役人に伝えていたことが、幾つか⁽²⁰⁾の文書からうかがえる。

更にナボニドスの治世中に *ša reš šarri bēl piqitti Eanna* に在職していた人物は3人いるが、彼らの在職期間は最初の在任者ナブー・シラ・ウツルが治世

1年から12年、彼の後任者イリー・レーマンニが治世14年から16年、そして最後の在職者ナブー・アハ・イッディンがナボニドスの治世最後の年である治世17年からアケメネス朝時代まで在職していたことが確認されている。⁽²¹⁾このように *ša reš šarri bēl piqitti Eanna* もまた、*qīpu* や *šatammu* といった他の主要神殿役人と同じように、同時期に複数の人間がこの役職に在職することがなかったのである。以上の事柄を考慮すると、やはり *ša reš šarri bēl piqitti Eanna* は少なくともナボニドスの治世では重要な役職であったと思われる。

最後に上記のエアンナ神殿の諸役人の出自について簡単に触れておくことにする。これまで見てきたエアンナ神殿の諸役人はすべて王が任命するのだが、*šakin tēmi ša Uruk* や *šatam Eanna*, *ṭupšar Eanna* といった役職に就いた人物はダビビ家やエギビ家等のウルクを代表する有力な家系に出身者が占めている。ここからこれらの役職に就いた人物はウルクの利益を代表していると推測でき⁽²²⁾る。これに対し、*qīpu ša Eanna* や *ša reš šarri bēl piqitti Eanna*, *ša reš šarri ša (ina) muḫḫi quppi ša šarri* については、これらの役職在任者が文書に言及せれる場合、家系が述べられることがないため、彼らの出自に関して明確なことがわからない。しかしこの事は、何人かの研究者が指摘しているように、この役職に就任した人物がバビロンから派遣されてきたという可能性を示唆している。⁽²³⁾もし在職者がバビロンから派遣されたとするならば、バビロンに王宮があったことを考えると、その人物は王権に近い人物であったと思われる。ただし *ša reš šarri bēl piqitti Eanna* と *ša reš šarri sa (ina) muḫḫi quppi ša šarri* に関しては、*ša reš šarri* という役職が宦官であった故に家系が書かれなかったということも指摘されている。⁽²⁴⁾しかし、*ša reš šarri* が宦官であったとするならば、宦官は王の所有物であったということからこの役職は間違いなく王権側の役職であったと言えるであろう。このように、エアンナ神殿の諸役職は王権を代表する役職とウルクを代表する役職とに分けることができる。

II. *ina* GUB-zu

それでは *ša reš šarri bēl piqitti Eanna* は、エアンナ神殿の中でどのような地位を持っていたのであろうか。この問題を他のエアンナ神殿の役職と *ša reš šarri bēl piqitti Eanna* が共に言及されている文書を用いて検討してみたい。

経済文書の中で *ša reš šarri bēl piqitti Eanna* がエアンナ神殿の諸役人と一緒

に言及される場合、記録されている行為の立会人として述べられる場合 (*ina* GUB-zu タイプ) と、実際に活動し行為の当事者となっている場合 (タイプ 2) という 2 種類に分類することができる。それぞれのタイプにおいて、*ša rēš šarri bēl piqitti Eanna* がどの役職と一緒に言及され、その順番はどうなっていたかということを、*ša rēš šarri bēl piqitti Eanna* の在職した歴代の人物についてまとめたものが表 1 (*ina* GUB-zu タイプ) と表 2 (タイプ 2) である。

最初に *ina* GUB-zu タイプであるが、ナブー・シャラ・ウツルが *ša rēš šarri bēl piqitti Eanna* に在職していた期間には、*qīpu ša Eanna*, *šatam Eanna*, *tuṣsar Eanna*, *šākin ṭēmi ša Uruk*, *ša rēš šarri ša (ina) muḫḫi quppi ša šarri* と一緒に述べられている。それらの文書には小作契約に関する文書、税に関係した文書、窃盗や *širku*「神殿奴隷」に関する証言を記録している文書などがあ⁽²⁵⁾る。このように文書に記録されている内容は様々であるが、表 1 を見てわかるように、そのすべてにおいて *ša rēš šarri bēl piqitti Eanna* が他の神殿役人より先に言及されていることがわかる。ただしエアンナ神殿に関係している債務文書 YOS 6, 238, 1.17-20 では、言及される順番が *zazakku*「土地台帳管理官」と呼ばれる役職が一番目、2 番目に *ša rēš šarri bēl piqitti Eanna*、3 番目に *qīpu ša Eanna*、4 番目に *šākin ṭēmi ša Uruk* となっている。確かにこの文書では *ša rēš šarri bēl piqitti Eanna* は 2 番目に言及されているが、*zazakku* は本来エアンナ神殿の役人ではないと思われる役人で、この役職をのぞいて言及される順序を見れば、やはり *ša rēš šarri bēl piqitti Eanna* が 1 番最初に述べられているとみなすことができ⁽²⁶⁾よう。

イリー・レーマンニが言及されている文書の数、彼の在職期間が短いためか、前任者であるナブー・シャラ・ウツルが言及されている文書と比べて非常⁽²⁷⁾に少ない。それらの現存する文書を見る限りでは、イリー・レーマンニが *ina* GUB-zu タイプで *qīpu ša Eanna* と *tuṣsar Eanna*, *šākin ṭēmi ša Uruk* と一緒に言及されている文書はなく、*šatam Eanna* と共に言及されている例が 1 例あるだけである。その文書 YOS 6, 177 は小作料 (*imittu*) に関して何か不正があり、罰金をエアンナ神殿に支払うよう命じている文書である。表 1 からわかるように、*ša rēš šarri bēl piqitti Eanna* と *šatam Eanna* が言及される順番は、ナブー・シャラ・ウツルの時と異なり、*šatam Eanna* が 1 番目、*ša rēš šarri bēl piqitti Eanna* が 2 番目になっている。

最後の在職者ナブー・アハ・イッディンが言及されている文書の数も非常に少ないが、一緒に言及されている神殿役人は、イリー・レーマンニと同様、*šatam Eanna* だけになっている。文書の内容は、船の賃貸契約とエアンナ神殿所有の家畜の窃盗に関する⁽²⁸⁾こと、そして債務文書であるが、言及される順番は、これもイリー・レーマンニと同様に *šatam Eanna* が最初になっていることが表 1 からわかる。

III. タイプ 2

次に、文書に書かれている行為の当事者として *ša reš šarri bēl piqitti Eanna* と他の神殿役人が一緒に言及されているタイプについて、表 2 を参照しながらみていく。

ナブー・シャラ・ウツルの場合、一緒に言及されている他の神殿役人は *qīpu ša Eanna* と *šatam Eanna*, *ṭupšar Eanna*, *šākin ṭēmi ša Uruk*, そして *bēle piqnēti ša Eanna* である。文書の内容は、小作契約文書や小作料の査定命令文書、*sirku* の受け入れを記録している文書など多種多様である⁽²⁹⁾が、諸役人の言及される順序は *ša reš šarri bēl piqitti Eanna* が 1 番目である。

しかしイリー・レーマンニが *ša reš šarri bēl piqitti Eanna* 職に就任すると、一緒に述べられている役人はナブー・シャラ・ウツルの在職中とほとんど変わらないが、その言及される順番が *šatam Eanna* が 1 番目、*ša reš šarri bēl piqitti Eanna* が 2 番目と変化していることが表 2 から見て取れる。ただし *sirku* に関する尋問を記録している文書 YOS 6, 224 では、*šākin ṭēmi ša Uruk* が一緒に言及されていて、その順番は *šākin ṭēmi ša Uruk* が 1 番最初で次が *šatam Eanna*, 最後⁽³⁰⁾に *ša reš šarri bēl piqitti Eanna* となっている。この場合、*šākin ṭēmi ša Uruk* がエアンナ神殿の役人ではないということを考慮すれば、神殿役人の内で *šatam Eanna* が 1 番最初に言及されていると問題なく言えよう。

ナブー・アハ・イッディンに関係した文書では、*šatam Eanna* と *ṭupšar Eanna*⁽³¹⁾ と共に述べられている文書が 2 つあるだけである。彼らの言及される順番はどちらの文書においても、*šatam Eanna* が 1 番目、*ša reš šarri bēl piqitti Eanna* が 2 番目、最後に *ṭupšar Eanna* になっていることがわかる。

IV. 3人の *ša reš šarri bēl piqitti Eanna* の間に見られる変化

前節では歴代の *ša reš šarri bēl piqitti Eanna* と他のエアンナ神殿の諸役人との関係を2つの表をもとに見てきたわけだが、その関係には幾つかの注目すべき変化のあることがわかる。まず第一に、ナブー・シャラ・ウツルが在職していたときとイリー・レーマンニ以降では、言及される順番が異なっていることである。ナブー・シャラ・ウツルの在職中には必ず彼が最初に述べられ、*qīpu ša Eanna* や *šatam Eanna*, *ṭupšar Eanna* という主要な神殿役人はその後に言及されていた。しかしイリー・レーマンニが *ša reš šarri bēl piqitti Eanna* 職に就くようになると、*šatam Eanna* が *ša reš šarri bēl piqitti Eanna* より先に必ず言及されるようになっていく。言い換えれば、ナボニドスの治世13年以降になると言及される順番が変化したといえることができる。第2の変化はナブー・シャラ・ウツルの在職期間中に見られる。ナボニドスの治世10年までは *ša reš šarri bēl piqitti Eanna* と *šatam Eanna* は文書の中に一緒に言及されるのがなかったが、治世11年以降になると突然一緒に言及されるようになるのである。この2つの変化は *ša reš šarri bēl piqitti Eanna* のエアンナ神殿における地位の変化を反映していると思われる。このことから、この役職は治世10年までは *qīpu ša Eanna*, *šatam Eanna*, *ṭupšar Eanna*, そして *šākin tēmi ša Uruk* という重要な役職よりも地位が高かったが、治世11年以降にその地位が徐々に変化していき、治世13年以降になると *šatam Eanna* の下になったと推測できる。

ša reš šarri bēl piqitti Eanna のこうした地位の変化はこの役職の活動内容にも反映していると文書から窺える。例えば債務者の召喚と引き取りをナブー・シャラ・ウツルは単独で行っているのに対し、イリー・レーマンニ以降になると *šatam Eanna* と共にである。同様に、不正に関する処罰の決定における立会人の場合、ナブー・シャラ・ウツルは単独で立ち会っているのに対し、イリー・レーマンニ以降は *šatam Eanna* と共同になっているのである。⁽³²⁾

更に YOS 6, 232 と AnOr 8, 30 の比較からは興味深い事実が浮かび上がってくる。この2つの文書はどちらも *ēmidu* 「税査定官」に小作料の査定を命じている文書で、YOS 6, 232 は治世12年の文書で AnOr 8, 30 が治世13年の文書である。査定を命じている役人は、YOS 6, 232 ではナブー・シャラ・ウツルと *qīpu ša Eanna*, *šatam Eanna*, そして2人の *ṭupšar Eanna*, AnOr 8, 30 では *šatam Eanna* と2人の *ṭupšar Eanna* となっている。2つの文書にでてくる2

人の *tuṣṣar Eanna* はどちらもナーディンとキナーという人物で、彼らの在職期間はアケメネス朝時代まで及んでいる。また両文書にでてくる *šatam*⁽³³⁾ *Eanna* はともにゼーリヤで、その在職期間は治世13年までと確認されている。⁽³⁴⁾ 一方ナブー・シャラ・ウツルは治世12年まで在職していたことが確認されていて、イリー・レーマンニが治世14年から在職していたことがわかっている。従って、*AnOr* 8, 30 が作成された治世13年にはまだナブー・シャラ・ウツルが *ša rēš šarri bēl piqitti Eanna* に在職していた可能性はあるが、この文書には彼の名前と役職名は言及されていないのである。以上のことから、*ša rēš šarri bēl piqitti Eanna* の地位の変化と同様に、その活動範囲に関しても何らかの変化が⁽³⁵⁾ 治世13年頃にあったと考えられる。

このような *ša rēš šarri bēl piqitti Eanna* の地位と活動内容の変化は、ちょうどエアンナ神殿の諸役人の交代時期とほぼ一致している。既に述べたように、*ša rēš šarri bēl piqitti Eanna* の交代時期は治世12年から14年の間とはっきりしていないのであるが、*šatam Eanna* と *šākin tēmi ša Uruk* に関しては治世13年のある時期に交代したことがわかっている。⁽³⁶⁾ そして *qīpu ša Eanna* は、治世13年以降の文書の中で言及されなくなっているのである。⁽³⁷⁾ また *ša rēš šarri ša (ina) muḫḫi quppi ša šarri* も治世13年頃に在職者が入れ替わっている。しかもこの役職にはそれまで3人の人間が同時に在職していたのであるが、この交代以降は複数の人間が同時に在職していた証拠が無く、1人の人物だけがこの役職に就くようになったと思われる。⁽³⁸⁾ この事は *ša rēš šarri ša (ina) muḫḫi quppi ša šarri* 職の重要性が増したことを示唆していると言える。

tuṣṣar Eanna に関しては、ナブー・シャラ・ウツルが *ša rēš šarri bēl piqitti Eanna* に在職していた時から変化が見られる。*tuṣṣar Eanna* の在職者の名前はナボドスの治世2年までは *TCL* 12, 75 や77等の文書に見られるが、⁽³⁹⁾ 治世3年以降になると名前が述べられなくなっている。例えば、治世8年に作成された文書 *YOS* 6, 145 の8行目では、*tuṣṣar Eanna* の名前が言及されず、単に *LÚ. UMBISAG.MEŠ šā É-an-na* という *tuṣṣar Eanna* の複数形の形でナブー・シャラ・ウツルと一緒に言及されている。しかし治世12年になると、*tuṣṣar Eanna* の名前が再び言及されるようになるが、前述の文書 *YOS* 6, 232 が示すように、在職者は複数であり、役職名も *LÚ. UMBISAG.MEŠ šā É-an-na* となっている。一度は在職者の名前が言及されなくなった *tuṣṣar Eanna* が再び

名前が治世12年以降でてくるようになったということは、*ša reš šarri bēl piqitti Eanna* の地位の変化と何らかの関係があるものと考えられる。しかし、他の神殿役人の在職者が1人だけであったのに対し *tuṣšar Eanna* は複数の人物が在職していたということを考えると、*tuṣšar Eanna* の重要性は低くなったと思われる。

以上のように、*ša reš šarri bēl piqitti Eanna* の地位の変化して時期とエアンナ神殿の主要役職の交代した時期は治世13年頃と一致している。元ナボニドスはその治世の始めに神殿行政に対して介入を行い諸役職の在任者を入れ替えている。その目的は、おそらく、王位篡奪者であるナボニドスがエアンナ神殿の経済を管理し、神殿に対して王権を強化することであったと思われる。この目的のために、ナボニドスは従来からあった *qīpu ša Eanna* や *šatam Eanna* という役職よりも *ša reš šarri bēl piqitti Eanna* という役職を重視し、*ša reš šarri ša (ina) muḫḫi quppi ša šarri* を新たに設置したと考えられる。

治世13年の変化もナボニドスの神殿行政に対する介入の結果と考えられる。それではなぜこの時期に介入したのであろうか。この事に関連した興味深い記事がナボニドスの年代記に載っている。その年代記によれば、ナボニドスの治世9年のニサヌの月にアケメネス朝ペルシャの王キュロス2世が軍隊を率いてティグリス河を渡り、リディア王を破って戦利品を取り、守備隊を駐屯させた⁽⁴⁰⁾とある。残念ながら年代記の治世10年の記事には、アケメネス朝に関する記述が無く、また治世11年から17年目までの箇所が欠落しているのでその後新バビロニアとアケメネス朝との間に軍事衝突があったかどうか明確ではない。しかしこの治世9年という年は、*šatam Eanna* が頻繁に文書に言及されるようになる年と一致し、*ša reš šarri bēl piqitti Eanna* と共に文書にでてくるようになる年は治世11年からである。そしてエアンナ神殿の諸役職の交代時期は治世13年頃である。以上のことから、Beaulieu も指摘しているように、ナボニドスがこの時期にペルシャの軍事的脅威を感じこれに対抗するためにアラビア半島のテイマからバビロンに帰還し、エアンナ神殿の行政に再び介入したという可能性は大いにあり得ることである。⁽⁴¹⁾そしてその結果、*šatam Eanna* の地位が *ša reš šarri bēl piqitti Eanna* よりも上になったと思われる。

V. 結 論

以上に論じてきたように、ナボニドスの治世期間における *ša reš šarri bēl piqitti Eanna* のエアンナ神殿内の地位は決して一定ではなく、治世13年を境にはっきりと変化し活動内容も変化している。治世13年までは、神殿役人のヒエラルキーの中で頂点を占めていたが、治世13年以降は地位が *šatam Eanna* の下になったのである。それでも文書の中で必ず *tuṣṣar Eanna* よりも先に言及されていることから、*ša reš šarri bēl piqitti Eanna* はエアンナ神殿の中で以前として高い地位を占めていたと言えよう。

こうした変化にはナボニドスのエアンナ神殿の行政に対する介入の結果が反映されている。既に Sack や Beaulieu が指摘しているように、エアンナ神殿に対する介入はナボニドスが最初ではなく、ネルグリッサル王もエアンナ神殿の重要な役職の任命と罷免を行っている。⁽⁴²⁾ ナボニドスの場合、治世の初期と治世13年頃にエアンナ神殿の行政に対して介入を行っている。そして2度目の介入の結果、*šatam Eanna* の地位が *ša reš šarri bēl piqitti Eanna* よりも上になったと言える。しかし、*ša reš šarri ša (ina) muḫḫi quppi ša šarri* は以前よりも重要度が増し、また最初に触れたように、*ša reš šarri ša (ina) muḫḫi quppi ša šarri* は王権の代弁者の1人であり、*šatam Eanna* はウルクの有力者の代弁者である。こうした事から、ナボニドスは一方でウルクの有力者達に対して妥協し、その一方で王権による神殿管理を強化したと推測できる。

このようにナボニドスの治世中における *ša reš šarri bēl piqitti Eanna* の地位を確認できたわけだが、Sack が簡単に触れた *ša reš šarri bēl piqitti Eanna* が言及されているというネブカドネザル2世時代の文書 *PTS 74* は現時点で確認することができなかった。また、なぜ *šatam Eanna* が治世の初期に文書の中にあまりでてこないのか、なぜ *qīpu ša Eanna* は治世13年以降文書中に言及されなくなるのか、という問題については何も言えずにきた。ナボニドスの神殿政策の全貌を解明するためには、ナボニドスの治世期間中だけではなく、ナボラッサルの時代まで遡って *ša reš šarri bēl piqitti Eanna* をはじめとするエアンナ神殿の主要役人の研究をする必要があると思われる。こうした研究は更に新バビロニア時代の諸王の神殿政策の解明につながるであろう。

注

- (1) M. San Nicolò, *Beiträge zu einer Prosopographie neubabylonischer Beamten der Zivil- und Tempelverwaltung* (SBAW 2/2), München, 1941.
- (2) その後の研究としては, H. W. F. Saggs, “Two Administrative Officials at Erech in the 6th Century B.C.”, *Sumer* 15, 1959, pp.29-38, R. H. Sack, “The Scribe Nabû-bāni-aḫi, Son of Ibnā, and the Hierarchy of Eanna as seen in the Erech Contracts”, *ZA* 67, 1977, pp.42-52, H. M. Kümmel, *Familie, Beruf und Amt im spätbabylonischen Uruk* (Abhandlungen der Deutschen Orient-Gesellschaft 20), Berlin, 1979, G. Frame, “Nabonidus, Nabû-šarra-ušur, and the Eanna Temple”. *ZA* 81, 1991, pp.37-86 等がある。
- (3) Sack の見解に関しては, Sack, *Cuneiform Documents from the Chaldean and Persian Periods*, London and Toronto, 1995, pp.16-29 (以後 Sack, *Cuneiform Documents* と略), “Royal and Temple Officials in Eanna and Uruk in the Chaldean Period”, M. Dietrich/O. Lorentz eds., *AOAT* 240, Neukirchen-Vluyn, 1995, pp.425-432 (以後 Sack, *AOAT* と略) を参照のこと。なお, エアンナ神殿の諸役人に関する Sack の見解については次章を参考のこと。*ša reš šarri bēl piqitti Eanna* の訳語の関しては, 現在のところ研究者の間で決まった訳語はない。例えば San Nicolò は “der kgl. Kommissar (und) Verwaltungsbeamte von Eanna” とし, Frame は “the royal official (and) supervisor of Eanna” としている (San Nicolò, *op. cit.*, p.9, Frame, *op. cit.*, p.40)。また Beaulieu は “royal servant in charge of affairs of the Eanna” という訳を付けている (P-A. Beaulieu, *The Reign of Nabonidus, King of Babylon 556-539 B.C.* (YNER 10), p.126)。しかし Sack は “royal representative (who is) also an executive assistant (in) Eanna” という訳語が実態により即していると述べている (Sack, *AOAT*, p.431)。このように訳語が研究者の間で様々なので, 本稿では一応 Frame の訳語に近い「王の役人兼エアンナの監督官」としておく。
- (4) この事は既に Frame が指摘している。Frame, *op. cit.*, p.79.
- (5) *ša reš šarri bēl piqitti Eanna* が言及されている現存する文書に関しては San Nicolò, *op. cit.*, pp.18-21, Kümmel, *op. cit.*, pp.145-146, Frame, *op. cit.*, pp.81-86, Sack, *Cuneiform Documents*, pp.39-40, Beaulieu, *op. cit.*, p.161 を参照のこと。
- (6) Frame, *op. cit.*, pp.65-66, Beaulieu, *op. cit.*, pp.117-127. この2人によると, YOS 6, 10, 11, PTS 2097 といった文書から, 治世の初期にナボニドスは食料支給の規定を改定するなどの干渉をエアンナ神殿に対して行なったとしている。また2人によれば, ナボニドスは治世3年までに *ša reš šarri sa (ina) muḫḫi quppi ša šarri* をエアンナ神殿に設置したという。この役職の役割に関する先行研究としては, R. P. Dougherty, “Cuneiform Parallels to Solomon’s Provisioning System”, *AASOR* 5, 1923/24, pp.23-65 がある。この中で Dougherty は, エアンナ神殿の門や神殿内に

quppu ša šarri「王のバスケット」が置かれ、その中に銀や穀物、犠牲に捧げられた動物の肉が入れられたとし、その管理をしていたのが *ša reš šarri sa (ina) muḫḫi quppi ša šarri* であったと述べている。また、M.A.Dandamayev, “State and Temple in the Babylonia in the First Millenium B.C.”, E.Lipinski ed., *State and Temple Economy in the Ancient Near East*, vol.2, 1979, p.590 によれば、この役職はエアンナ神殿における王の収入を監視する役割があったと思われる役職である。更に *TCL* 12, 80 には、*atū ša bāb bit alpi*「牛舎の門番」が牛と羊のための穀物を持ち出すためには *ša reš šarri ša (ina) muḫḫi quppi ša šarri* の許可が必要であったことが書かれており、神殿所有の穀物を管理していた事が窺われる。

- (7) 本論は修士論文で扱ったテーマの該当部分を改定したものである。
- (8) *qīpu* と *šatammu* の機能に関しては、San Nicolò, *op. cit.*, p.24, n.24, p.26. n. 40, Sack, *Cuneiform Documents*, pp.17-18 を参照のこと。
- (9) Sack, *ibid.*, p.28, n.65, *AOAT*, p.428.
- (10) San Nicolò, *op. cit.*, p.21, n.1, Sack, *AOAT*, p.427
- (11) San Nicolò, *op. cit.*, pp.13-18, Kümmel, *op.cit.*, pp.139-144.
- (12) San Nicolò, *op.cit.*, p.28, n.65, p.29-30, n.72.
- (13) ここで紹介した *tupšar Eanna* に関する一連の Sack の見解に関しては、Sack, *Cuneiform Documents*, p.19, *AOAT*, pp.429-431 を参照のこと。
- (14) Sack, *Cuneiform Documents*, p.20, *AOAT*, p.430.
- (15) San Nicolò, *op. cit.*, p.29-30, n.72.
- (16) Sack, *Cuneiform Documents*, pp.19-20, *AOAT*, pp.430-432. ネブカドネザル 2 世の時代に *ša reš šarri bēl piqitti Eanna* が言及されている文書は *PTS* 74 であるが、彼はこの文書を証拠としてあげているだけで、文書の内容や在任者の名前は挙げていない (*AOAT*, p.430)。また、*Cuneiform Documents*, p.39 でもナブー・シャラ・ウツルより前の在任者をリストしていない。
- (17) Sack, *Cuneiform Documents*, p.20. 彼がここであげているのは *bēl piqitti ša qīpu* と *bēl piqitti PN* である。特に後者は、その役職に在職していたことが個人名で確認されている様々な役人の *bēl piqitti* であると彼は述べている。そしてこの中にはネルグリッサルの *bēl piqitti* も含まれるとしているが、彼はこの *bēl piqitti* を役職に在職者リストに載せていない。 *ibid.*, pp.38-39.
- (18) Sack, *Cuneiform Documents*, p.20, *AOAT*, p.430. それ故 Sack は、*bēl piqitti* という言葉を “officer” と訳すよりも “executive assistant” と訳したほうがよいとしている。
- (19) Sack, *Cuneiform Documents*, p.19-p.20, *AOAT*, pp.430-432. 実際、ナボニドスの治世下にこの役職に就いた最初の人物ナブー・シャラ・ウツルは、ネブカドネザル 2 世の時代に *ša reš šarri* として文書にでてきていることが確認されている (Weisberg, *YNER* 1, no.6 と *Nbk* 394)。特に *YNER* 1, no.6 からは、彼がエアンナ

神殿の監督官達 (*bēlē piqnēti ša Eanna*) と共に行動していることがわかる。またナボニドスの治世の初期にも *ša rēš šarri* として文書にでてきている。Frame, *op. cit.*, p. 83 を参照のこと。

- (20) ナボニドスの治世を通じての *ša rēš šarri bēl piqitti Eanna* の活動に関しては、拙稿、「エアンナ神殿の所領地経営における *ša rēš šarri bēl piqitti Eanna* の役割について」『中央大学大学院論究』(文学研究科篇) 第27号, pp.124-136 を参照のこと。また、ナブー・シャラ・ウツルの活動に関しては Frame, *op. cit.*, 66 ff. を参照のこと。特に *ša rēš šarri bēl piqitti Eanna* が王令を受け取り他の神殿役人にその王令を伝達していることを記録している文書 YOS 6, 10, 71, PTS 2097 に関しては Frame, *op. cit.*, pp.71-72, Beaulieu, *op. cit.*, p.126 を参照のこと。
- (21) Beaulieu, *ibid.*, p.161, Table 8 にこの3人の在職期間が載っていて、この表によるとナブー・アハ・イッディンの在職期間はカンビュセス2世の治世4年までである。
- (22) これらの役職の在任者の *prosopographie* に関しては Kümmel, *op. cit.*, pp.137-146 を参照のこと。
- (23) この事は、既に Kümmel, *op. cit.*, p.109, Dandamayev, “The Neo-Babylonian Citizens”, *Klio* 63, 1981, p.46 で指摘されている。
- (24) Frame, *op. cit.*, pp.66-67, n.65. この注の中で彼は、ナブー・シャラ・ウツルの名前を持った様々な人物(ナブー・シャラ・ウツルが誰かの息子と書かれている場合と誰かがナブー・シャラ・ウツルの息子と書かれている場合)と *ša rēš šarri bēl piqitti Eanna* に在職していたナブー・シャラ・ウツルとの間を結びつける証拠がないとし、*ša rēš šarri* に在職した人物が宦官であることに反証する証拠がないとしている。
- (25) 大麦の受領文書: *TCL* 12, 75; *širku* 関係: *BIN*-1, 120, YOS 6, 79, 129; 小作契約: YOS 6, 33, 67; 税関係: *GC*-1, 380, *TCL* 12, 106, YOS 6, 59, 145, 159, 238; 家畜関係: YOS 6, 77; 窃盗に関する証言: *AnOr* 8, 27.
- (26) *CAD.Z*, p.75-b には、*zazakku* は宮殿において高い行政的地位を占め、神殿関係のことに関与していたと思われる役職とある。また Kümmel, *op. cit.*, p.138 によると、*zazakku* は一地方の役人ではなかった。彼の見解は Beaulieu や Dandamayev によって支持されている。彼らは、この役職は神殿が必要とする物資をバビロンから諸都市にある神殿へ供給することを監督する立場にあったと述べている。Beaulieu, “UBARA (EZENxKASKAL)^{k1}=Udannu”, *Acta Sumerologica* 13, 1991, p.103, Dandamayev, “The Neo-Babylonian *zazakku*”, *Altorientalische Forschungen* 21, 1994, pp.39-40.
- (27) 現時点で確認できたイリー・レーマンニに関係した文書は全部で9つである。これに対してナブー・シャラ・ウツルに関係した文書は80以上ある。San Nicolò, *op. cit.*, pp.18-19, Frame, *op. cit.*, pp.82-86 と、拙稿、前掲論文, p.139, 注(38)を参照のこと。

- (28) 家畜関係の債務文書: *TCL* 12, 119; 家畜の窃盗: *YOS* 6, 169 (duplicate *YOS* 6, 231); 船の賃貸契約: *PTS* 2301 (Frame, “Some Neo-Babylonian and Persian Documents Involving Boats”, *Oriens Antiquus* 25, 1986, pp.36-39), *TCL* 12, 121, *YOS* 6, 195. なお *TCL* 12, 119 には *šatam Ezida* も述べられていて、言及されるのはこの役職が1番である。また *YOS* 6, 169 には *Nabû-taddannu-ušur* と *Bagi’azu* という人物が *ša reš šarri* と述べられている。
- (29) 小作契約文書: *TCL* 12, 90, *YOS* 6, 26, 33, 40, 41, 67, 150; 家畜関係: *TCL* 12, 77, *YOS* 6, 26, 40, 41, 123, 144, 150; 税関係: *YOS* 6, 145, 232; *sirku* 関係: *YOS* 6, 154; 様々な契約: *YOS* 6, 34, 87; 司法関係: *AnOr* 8, 25 (?), *YOS* 6, 92, 144; 取引に関する文書: *YOS* 6, 115.
- (30) *YOS* 6, 224, 1.18-19. ここでは *ša reš šarri bēl piqitti Eanna* と *šatam Eanna*, *šakin tēmi ša Uruk* の役職名だけが言及され名前はでてきていない。この文書は立会人の名前が最初に挙げられている文書で, *šakin tēmi ša Uruk* はその最初に名前がでてくる(1.1)。ちなみに *šakin tēmi ša Uruk* のあとに立会人としてでてくるのは *ša reš šarri ša (ina) muḫḫi quppi ša šarri* である(1.2)。また *šatam Eanna* と *ša reš šarri bēl piqitti Eanna* が最初にでてくるのは10-12行目で、この時は名前と役職名が書かれている。その順序は *šatam Eanna* が1番目で *ša reš šarri bēl piqitti Eanna* がその次である。
- (31) その2つの文書とは、*TCL* 12, 119 が羊に関する債務証書の関する文書、*YOS* 6, 156 が供物用に屠殺された羊に関する尋問と証言に関係した文書である。
- (32) ナブー・シャラ・ウツルの債務者の召喚と引き取りに関する文書には *YOS* 6, 64, 147 等がある。不正に関する文書としては *YOS* 6, 120, 122, 134 等がある。文書に記録されている内容に関しては、拙稿、前掲論文, p.139, 注(38)を参照のこと。
- (33) Kimmell, *op. cit.*, p.144 によると、キナーの在職期間はナボニドスに治世12年からキュロス2世の治世4年まで、ナーディンがナボニドスの治世12年からカンビュセス2世の治世4年までである。この事実、同時期あるいはほぼ同時期に複数の人間が *ṭupšar Eanna* と呼ばれたという Sack の説を裏付けていよう。
- (34) Beaulieu, *YNER* 10, p.161, Table 8, Sack, *Cuneiform Documents*, p.35.
- (35) また Beaulieu, *op. cit.*, p.164, Table 9 によると、ナボニドスまたは皇太子ベルシャザルからの手紙の受取人が、治世13年までは *ša reš šarri bēl piqitti Eanna* が、それ以降は *šatam Eanna* が受け取るようになっている。
- (36) Beaulieu, *op. cit.*, pp.160-162 によれば、*šakin tēmi ša Uruk* の在職者はナボニドスの治世6年から13年までが *Ṭābija* で、治世13年からキュロス2世の治世1年までが *Nādinu* になっている。また *šatam Eanna* の在職者はナボニドスの治世6年から13年までが *Zerija* で、治世13年から16年までが *Kurbanni-Marduk* で、治世17年からカンビュセス2世の治世4年までが *Nabû-aḫa-iddina* であった。
- (37) *qṭpu ša Eanna* が再び文書の中に言及されるようになるのはアケメネス朝の

キュロス 2 世の時代である。Kümmel, *op. cit.*, pp.140-141, Sack, *Cuneiform Documents*, pp.32-34.

(38) Kümmel, *op. cit.*, pp.145-146, Beaulieu, *op. cit.*, pp.160-162, Sack, *Cuneiform Documents*, pp.32-34. またこの役職の在職者と在職期間は以下の通りである (Kümmel, *ibid.*, Beaulieu, *ibid.*, p.165, Table 8)。リブルトゥゥがナボニドスの治世 2 年から13年まで、アイガーシュが治世 4 年から12年まで、マルドゥク・ブツリトゥ・アンニが治世 4 年から12年まで、シリム・イリーが治世15年からカンビュセス 2 世の治世 6 年まで。

(39) Sack, *Cuneiform Documents*, p.38. ここで述べた文書にでてくる *ṭupšar Eanna* はナブー・アッヘー・ブツリトという人物である。彼はネブカドネザル 2 世の治世26 年からナボニドスの治世 2 年までの文書で、*ṭupšar Eanna* と *ṭušar bīti* という 2 つのタイトルで呼ばれている (Kümmel, *op. cit.*, p.118, 114)。Frame は、この 2 つの役職の差異に関しては明確なことが言えず、更に研究する必要があると述べている (Frame, *ZA* 81, p.47)。よって本稿ではとりあえずこの 2 つの役職をまとめて扱った。

(40) A.K.Grayson, *Assyrian and Babylonian Chronicles (TSTS 3)*, 1975, pp.107-108. リディアという地名は、この地名の後半部分が欠落しているため、Grayson が復元したものである。この復元に対し Beaulieu は、その欠落箇所をリディアと復元することには無理があるとしながらも、ギリシャの史料からリディアが征服された年はまさにこの年であったとしている。また、この時期に皇太子ベルシャザルがアケメネス朝の攻撃に備えるためにバビロニア北部へ軍隊を動かしたか、もしくはアケメネス朝に遠征する目的でバビロニアから離れていた可能性がある、と彼は推測している (Beaulieu, *op. cit.*, pp.199-200)。

(41) Beaulieu, *ibid.*, p.203.

(42) San Nicolò, *op. cit.*, pp.29-30, Kümmel, *op. cit.*, p.146, Sack, *AOAT*, p.431. 特にネルグリッサルのエアンナ神殿に対する介入に関しては、Sack, “Nergal-šarra-ušur, King of Babylon, as seen in the Cuneiform, Greek, Latin and Hebrew Sources”, *ZA* 68, 1978, pp.135-136, Beaulieu, *op. cit.*, p.125 を参照のこと。

表1・*ina* GUB-zu タイプ

ša rēš-ša rēš šarri bēl piqitti Eanna / qīpu-qīpu ša Eanna / šatammu-šatam Eanna
šākin-šākin ūmi ša Uruk / quppu-ša rēš šarri ša (ina) muḫhi quppi ša šarri

文書 (治世年)	在任者	<i>ša rēš</i>	<i>qīpu</i>	<i>šatammu</i>	<i>tuṣšarru</i> ¹	<i>šākin</i>	<i>quppu</i>	<i>zazakku</i>
<i>TCL</i> 12, 75 (1)	<i>Nabû-šarra-ušur</i>	1			2			
<i>BIN</i> -1, 120 (3)	<i>Nabû-šarra-ušur</i>	1					2	
<i>YOS</i> 6, 33 (3)	<i>Nabû-šarra-ušur</i>	1	2					
<i>YOS</i> 6, 77 (4)	<i>Nabû-šarra-ušur</i> ²	1					2	
<i>YOS</i> 6, 59 (4)	<i>Nabû-šarra-ušur</i>	1	2					
<i>YOS</i> 6, 67 (4)	<i>Nabû-šarra-ušur</i>	1					2	
<i>YOS</i> 6, 79 (5)	<i>Nabû-šarra-ušur</i>	1	2					
<i>YOS</i> 6, 145 (8)	<i>Nabû-šarra-ušur</i>	1					2	
<i>YOS</i> 6, 129 (8)	<i>Nabû-šarra-ušur</i>	1					2	
<i>YOS</i> 6, 238 (9)	<i>Nabû-šarra-ušur</i>	2	3			4		1
<i>YOS</i> 6, 159 (10)	<i>Nabû-šarra-ušur</i>	1	2					
<i>AnOr</i> 8, 27 (12)	<i>Nabû-šarra-ušur</i>	1	2	3				
<i>GC</i> -1, 380 (12)	<i>Nabû-šarra-ušur</i>	1		2				
<i>TCL</i> 12, 106 (12)	<i>Nabû-šarra-ušur</i>	1		2				
<i>YOS</i> 6, 177 (16)	<i>Ilī-rēmenni</i>	2		1				
<i>YOS</i> 6, 169 (17)	<i>Nabû-aḫa-iddin</i>	2		1				
<i>PTS</i> 2301 (17)	<i>Nabû-aḫa-iddin</i>	2		1				
<i>YOS</i> 6, 195 (17)	<i>Nabû-aḫa-iddin</i>	2		1				
<i>TCL</i> 12, 121 (17)	<i>Nabû-aḫa-iddin</i>	2		1				
<i>TCL</i> 12, 119 (17)	<i>Nabû-aḫa-iddin</i>	2		1				

1. *tuṣšarru* は *tuṣšarru Eanna* ではなく *tuṣšarru* を示す。

2. この文書までは *ša rēš šarri* と呼ばれているが、既に *PTS* 2097で *ša rēš šarri bēl piqitti Eanna* とある。

表2・タイプ2

ša rēš-ša rēš šarri bēl piqitti Eanna / qīpu-qīpu ša Eanna / šatammu-šatam Eanna
tupšarru-tupšar Eanna / šākin-šākin ĩēmi ša Uruk / bēlē-bēlē piqnēti ša Eanna

文書 (治世年)	在任者	<i>ša rēš</i>	<i>qīpu</i>	<i>šatammu</i>	<i>tupšarru</i>	<i>šākin</i>	<i>bēlē</i>
YOS 6, 26 (1)	<i>Nabû-šarra-ušur</i>	1					2
TCL 12, 77 (2)	<i>Nabû-šarra-ušur</i>	1					2
YOS 6, 41 (3)	<i>Nabû-šarra-ušur</i>	1					2
YOS 6, 40 (4)	<i>Nabû-šarra-ušur</i>	1					2
YOS 6, 33 (4)	<i>Nabû-šarra-ušur</i>	1	2				3
YOS 6, 67 (4)	<i>Nabû-šarra-ušur</i>	1					2
YOS 6, 34 (4)	<i>Nabû-šarra-ušur</i>	1					2
YOS 6, 115 (7)	<i>Nabû-šarra-ušur</i>	1			2 ¹		
YOS 6, 137 (7)	<i>Nabû-šarra-ušur</i>	1					2
YOS 6, 92 (7)	<i>Nabû-šarra-ušur</i>	1	3			2	
YOS 6, 87 (7)	<i>Nabû-šarra-ušur</i>	1					2
YOS 6, 145 (8)	<i>Nabû-šarra-ušur</i>	1			2		
TCL 12, 90 (8)	<i>Nabû-šarra-ušur</i>	1					2
YOS 6, 144 (9)	<i>Nabû-šarra-ušur</i>	1	2				3
YOS 6, 123 (9)	<i>Nabû-šarra-ušur</i>	1					2
<i>AnOr</i> 8, 25 (10)	<i>Nabû-šarra-ušur</i>	1			2		
YOS 6, 154 (11)	<i>Nabû-šarra-ušur</i>	1	2	3			
YOS 6, 150 (11)	<i>Nabû-šarra-ušur</i>	1			2		
YOS 6, 232 (12)	<i>Nabû-šarra-ušur</i>	1	2	3	4		
YOS 6, 219 (15)	<i>III-rēmenni</i>	2		1			
YOS 6, 224 (15)	<i>III-rēmenni</i>	3		2		1	
YOS 6, 198 (16)	<i>III-rēmenni</i>	2		1	3		
YOS 6, 221 (16)	<i>III-rēmenni</i>	2		1			
YOS 6, 156 (17)	<i>Nabû-aḫa-iddin</i>	2		1			
YOS 12, 119 (17)	<i>Nabû-aḫa-iddin</i>	2		1	3 ¹		

1. この文書では *tupšar Eanna* ではなく、LÚ. UMBISAG. MEŠ šá Ê-an-na となっている。